


<p>第216回 都市懇サロン レポート</p>	<p>「H29 都市計画実務発表会受賞業務について」</p>		
<p>講師</p>	<p>(株)国際開発コンサルタンツ プロジェクトマネージャー 松下 佳広氏 玉野総合コンサルタント(株) まちづくり推進部都市計画課 高柳 澄人氏</p>	<p>開催日</p>	<p>平成29年11月14日(火) 18:00~20:00</p>
<p>講師 プロフィール</p>			
<p>お話の概要</p>	<p><スマートウェルネスと持続可能な地域コミュニティへの取組を通じた、新潟県見附市のコンパクトなまちづくり> (松下氏)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○見附市立地適正化計画の策定支援 <ul style="list-style-type: none"> ・都市政策と住民の健康との関係をエビデンスとしてコンパクト化の必要性を説明。 ○見附駅周辺整備基本構想・基本計画策定 <ul style="list-style-type: none"> ・歩行者のための空間から優先して確保していく設計思想でプランを提案。 →地方都市において車依存文化からの脱却するためには、価値観・意識を変える「体験」をまちづくりプロセスに組み込む工夫が必要。 ○SWC協議会まちづくり分科会 地方都市ケーススタディ <ul style="list-style-type: none"> ・自立・持続可能なコミュニティの形成に向けた仕組みの構築支援。 →新しい地域経営のあり方と法制度がかみ合わない現状。SWC協議会などを通じて現場の実情を踏まえた制度提案に加え、ソーシャルビジネス化の支援もコンサルタントの新たな役割。 ○コンサルタントとしての関わり方について <ul style="list-style-type: none"> ・自身の専門分野に関する業務を多都市で展開するだけでなく、ひとつのフィールドの中で、都市計画、交通計画、設計、まちの運営などにゼネラリストとして関わることも大切。 ・特にまちの運営段階に関与できれば、設計段階まで繋げることができる。 <p><農地側からのコンパクトシティに対するアプローチ> (高柳氏)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○「農地活用ビジョン」の策定 <ul style="list-style-type: none"> ・岐阜県可児市は、人口増加傾向にあるなど開発需要が高く、個別の農振除外・農地転用が進行。さらなる個別開発による土地利用効率の低下が危惧される。 ・優良農地として保全する地域と、開発ポテンシャルにもとづいた効率的な土地利用転換が予想される地域を明確化することで、無秩序な開発による土地利用効率の低下を防ぐ。 ○都市のコンパクト化に向けて <ul style="list-style-type: none"> ・農地活用ビジョン＝農地側の土地利用方針によって、立地適正化計画・都市計画マスタープラン＝都市側の土地利用に関する施策・考え方を後押し。 ・結果として市全体の計画的・効率的な土地利用を実現。 		
<p>意見交換の概要</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・個人で都市計画からまちの経営まで、縦軸の業務をすべてこなすのは容易ではないが、この市は俺の市といえるようなフィールドをつくり、そこだけは縦軸で関われるよう尽力するのはコンサルとしての戦略であり、まちへの接し方として大切な姿勢。 ・ある地域のまちづくり会社等に出資することは、コンサル事業者としての事業の芽にもなるので、ある種の営業活動として効果的。今後はそのような事業としてのまちづくりにも取組んではどうか。 ・「農地活用ビジョン」は線引き外の土地所有者の農地が今後保全しづらくなるなど、長期的な視点が不足していることが課題。 ・農用地B(都市的土地利用を受け入れる地域)は個別の開発を受け入れるが、インフラ整備についての指針がない現状。今後はインフラ整備の指針を設定する必要がある。 		
<p>記録者のひとこと</p>	<p>地域ごとに直面する課題は異なるが、他の地域での取り組みが解決のヒントとなることは多く、自身の専門の領域外にはそれを得意とするコンサルタントがいる。社を超えたコンサルタントの繋がり・交流や情報交換は、多角化する課題への対応が求められる都市計画コンサルタントという役割を担うにあたって非常に重要なことと感じた。</p> <p style="text-align: right;">《都市懇サロン運営部会 委員代行 浜口彩音》</p>		